

カントウータ Cantuta

No. 1 2

平成 20 年 7 月 30 日発行
社団法人日本ポリビア協会

協会からのお知らせ

「イベント」への後援について

当協会には、ポリビア関係のイベントに関して会員への参加の案内および後援依頼さらには資金的援助依頼等の要請がありますが、この要請を受けるに当たっては、苦渋の判断を強いられます。協会として後援できない場合は、役員がプライベートな立場で、若干の寄付をさせて頂いたりしておりますが、参加したイベントの会計処理が公開されない場合が多すぎるのです。

特に『チャリティ』を謳う場合は、収入と収支および剰余金の寄贈先とその領収に関する情報が必要不可欠とおもいますが、この種の報告に接することができないのは誠に残念なことです。参加したイベントで報告を受けているのは「日本・ラテンアメリカ婦人協会」と「ポリビアンチャリティゴルフクラブ」のみです。

また、「開場を予約してイベントを組んだら、いつの間にかポリビア芸能関係の主権に摺り換えられていた。」「800 人収容の大ホールを『ポリビア人会』の名前で予約されているが、直前になっても代表者と全く連絡が取れない。」等々の苦情が、当協会に寄せられてきます。

このような事情から当協会としては少なくとも 3 年位の実績があり、経理等の透明性が確認できるイベントでないとは後援等のご協力は難しいと判断しています。(渡邊)

長谷ポリビア国会議員来訪



7 月 29 日ミチアキ・長谷ポリビア共和国国会議員(右から二人目)が来訪され、ポリビア情勢につき意見交換を行いました。この後、林屋会長との懇親会を開催しました。

長谷議員の祖父さんはサンフアン移住地への第一次いわゆる「西川移民」として入植され、長谷家は代々、篤農家としてサンフアン移住地の繁栄に尽力されてきました。

ポリビアの流動的かつ不安定な政治情勢の中で、日系人への不利な政策や、政治運動はともすれば誤解や過去の労苦を無視したやっかみに起因することがほとんどであり、その誤解を解消していくためにも、中央政府や州当局への日系社会からの情報発信は、今後ますますその重要性が増しています。その意味で長谷国会議員と伴井サンフアン・デ・ヤパカ二市長の存在は、この混迷を極める政治・社会情勢の中で極めて大きいものがあります。また、二人に続く人材の育成も切に望まれます。(記：渡邊)

野原昭子さんと 「聖マルティンの家」



2008年3月10日、当協会ではチャリテールゴルフのメンバーと共に野原昭子さんのお話をおききました。カンツータ11号にも野原さんのことは記載されていますし、テレビでも数回放映されましたのでご記憶の方もおいでかもしれません。野原さんはボリビア・コチャバンバで障害者の自立支援のリハビリ施設を主宰され、現在19人の障害を持つ子供たちが野原さんの「聖マルティンの家」で生活しています。野原さんが時々日本に帰国なさるのは、善意の寄付をいただいた方々へ「聖マルティンの家」の現状報告とお礼のため。

野原さんが障害児童の面倒を見るようになったのは、キリスト教のシスターとしてボリビアに派遣されたとき、道路脇に捨てられていた障害を持つ子供を見捨てることができず連れ帰ったことに始まります。それから次々に子供が連れてこられますが、障害のある子供だけをひき受け多い時は25人にもなり、食事の世話からリハビリまで息つく間もない忙しさ。当然家は狭くなりましたが、皆様の寄贈により家を広く、庭も広くなり、庭にはリハビリも兼ね果実の成る木を植えその実は食糧にしています。90本の果樹を善意の方から寄付され感謝しています。しかも庭には豚、羊、兎、ニワトリなど飼っていますが、総て食べるた

め。月に維持費は約3000～3500米ドル、善意の寄付金が最もありがたい。子供の衣類を送って下さる方もいらっしゃいますが、きれいに洗濯しビニール袋にきれいに入っていると新品と見なされ税金をとられます。きちんと袋に入れるより中古らしくグチャグチャの方が簡単に税関をパスされます。必要なものは赤ちゃん用小さいエプロンではなく大きいエプロン。51才の野原さん。小柄な体一杯に躍動感があり、お話の一つ一つが聞く人の心に強い感銘を与えておりました。(記：杉田)



いではくボリビアンチャリティゴルフクラブ会長(『北国の春』の作詞家)より野原さんにチャリティ資金を贈呈。また野原さんの来日に合わせて、ソプラノ歌手の宮良多鶴子さんから寄せられたチャリティも贈呈されました。



白川光徳・前駐ボリビア日本国大使(右奥)と赤のジャケットがお似合いの杉田副会長に挟まって、久しぶりの日本料理を味わわれる野原昭子さん。

田中大使よりお便りを頂きました！

日本ポリビア協会の皆様へ

初夏の候、日本・ポリビア協会の皆様におかれましては、ご清祥のこととお喜び申し上げます。私の当地赴任に際しましては、心のこもった歓送会を催して頂き、厚くお礼申し上げます。当地に着任して早や3ヶ月、この間のご無沙汰へのお詫び方々、雑駁ですが、協会の皆様に以下の通り近況ご報告申し上げます。

(旅立ち)

2月25日サンフランシスコ行きフライト出発時刻1時間前、突然、成田空港VIPルームにて、某航空会社の方が来られて曰く、「誠に恐縮ですが、経由地のマイアミからラパス行きのフライトには、一人2個までしか荷物を預けられませんので、この場で当座必要なものだけ携行されるように仕分けをして下さい。」と！昨夜遅くまで苦勞して詰めたものを、この期に及んでまた仕訳しろとは何たることと思いつつも、家内と公邸料理人と3人で汗だくでトランクの詰め替え作業を終え、無事機内に入りましたが、何とはなしにこの先を暗示しているようでイヤな予感を抱いたまま、成田を後にしました。

(任地到着)

2月26日未明、ラパス空港到着。飛行機から蛇腹を通って空港内にはいると、同胞大使館員とポリビア外務省儀典長の出迎え、隣接の貴賓室へ導かれる。なんとそこには早朝にも拘わらず、館員の方々や、ラパス日本人会の役員の方々が大勢出迎えに来られておりました。よくも標高4,000メートルの空港までお出でいただいたものだと感激。貴賓室の中央に置かれたソファに腰を掛けるや、ココ茶のサービス。民族衣装

に似たジャケットを着た儀典長は、高地にはこれが1番と、やおら右ポケットからココアの葉を取り出したのには、少々の緊張感と親しみを感じました。そして、医務官から健診を受けると、(富士山の高さを超える高地にいきなり飛来してきたので、当然なのですが)血圧がかなり高いということで、公邸に直行。再度、健診の結果、これくらいなら大丈夫との判断が下されー安心。公邸内の案内をしてもらった後、ひと休み。ぐっすり眠っていると館員から電話があり、「信任状奉呈式が明日に決まりました！」やっぱり成田での予感は的中したのです。

(初の感動)

2月27日午後、チヨケワンカ外相を表敬。外務省儀典担当から信任状奉呈の式次第について説明を受け、ぶっつけ本番。外務省からムーリョ広場を挟んで向かい側に位置する大統領官邸まで敷き詰められた赤絨毯の上を、大使館(本使、妻、館員)、外務省、軍の人々が隊列を組んで、行進。沿道には、何と数千人の市民がその行進を見守り、隊列が通り過ぎる際に拍手が起こる。官邸内では、再度隊列を組み直し、モラレス大統領に信任状を奉呈。その後、官邸を出た所で両国歌の演奏。君が代が終わった瞬間、参集していた市民からハヤヤハポン！(アイマラ語で日本、万歳！)の掛け声。これぞ親日感の現れと感動。(注)因みに、この日、ムーリョ広場に集まった群衆は、国会へデモを目的とした与党支持派の市民とのことでした。私も、自分の信任状奉呈式のために参集を呼びかけてくれたとは思ってはいませんが、式典挙行中はデモを一時中断してくれたのでしょう。

(続く感動)

3月末、サンタクルス県に出発。28日に

はサンファン移住地を訪問、晩にはサンタクルス市在住の邦人の方々と懇談、29日にはオキナワ移住地を訪れました。両移住地とも、歴史博物館を訪れ、その歴史を目の当たりにすると、先達の方々が如何に艱難辛苦を乗り越えられてこられたかが偲ばれ、今や立派に成長した移住地の姿に新たな感銘を覚えました。また、移住地の皆さんから、移住地の現況につき色々お話を聞かせていただきましたが、毎年のように洪水に見舞われ、不安定な政情に直面しながらも、こちらに根を下ろし、果敢に将来を切り開いていこうとする皆さんの姿勢に、勇気づけられた思いがします。28日の夜、若干体調を崩した私に、オキナワ移住地の歓迎昼食会では、お粥と梅干を提供いただいたのには、そのご配慮に心底感動いたしました。その後、モラレス大統領と懇談した際に、日本人移住地のお話をしたところ、大統領も若い頃に密林の大木を切り倒すのに大変な苦勞をされたとの思い出話をされ、感慨深げだったのが印象的でした。

（将来への不安）

オキナワ移住地に急ぎ出張した理由のひとつは、地方政府に在留邦人の方々に対する安全と支援をお願いすることでした。勿論、ラパスにおいても中央政府要人との会見では、必ずといってよいほど邦人の保護についてお願いするのですが、その度に、日本人移住地のポリビア社会への貢献振りに触れられ、また我が国の対ポリビア協力に対する高い評価がなされ、日本人に対する親近感を聞くにつけ、我が先達や現在当国において活躍されている邦人、日系人の方々に敬意の念を抱くとともに、心休まるものがあります。しかしながら、中央においては、5月4日に憲法改正に関する国民

投票の実施を決定し、サンタクルス県においても自治権拡大をめざす県民投票を同日に実施予定ということで、同県を巡る情勢が緊張を増すことが目に見えていたので、現地においても働きかけを行うことにしたのです。幸いにも、中央政府による国民投票は取り止められ、県民投票も大過なく実施されましたが、我が国をはじめ、EU、米州機構や近隣友好国の呼び掛けにも拘わらず、未だ中央政府と地方政府との融和を目指した十分な対話は実現しておらず、今後も予断を許しません。

（また感動）

5月15日、ラパスから西北西に車で2時間半程の所に位置するチチカカ湖畔の町、コパカパーナを訪れました。我が国の供与した無償資金協力から得た見返り資金で調達した道路整備などに使用される重機の贈呈式に出席するためです。会場となる町役場前の広場に到着するや否や、小学生からお年寄りまで、多くの人達が、花輪やジャガイモの首飾りを、首からかけてくれました。加えて花びらや紙吹雪を頭にこすりつけられ、折角とかした髪の毛も台無しと思いきや、毛糸の帽子を被せられ、それはそれは大歓迎を受けました。これだけでも感動ものなのですが、この町長さんが、なんと弱冠25才。ご承知のようにコパカパーナは、昔から聖地として知られ、毎年3月と8月に巡礼のため何万人もの信者が巡礼に訪れます。その町長さんが、JICAプロジェクトとして成功した鱒の養殖事業をモデルとして、近隣で養殖事業が展開されていることや、この町を単なる巡礼地としてではなく、国際的な観光地として振興していきたいとの意欲を聴かされ、歴史的な町に若い血が注がれ、更なる発展に期待がもて

ることを実感しました。

(これから)

6月1日には、ベニ県とバンド県で、また6月22日にはタリ八県でそれぞれ自治権を巡る県民投票が行われます。また、8月10日には、大統領、副大統領及び各県知事に対する不信任国民投票が行われる予定で、これから暫くは国内政治の季節が続きます。四半世紀前によく手に入れた民政、にも拘わらず貧困と貧富の格差からの脱却が達成できなかった政治が変革を巻き起こすべく初の先住民大統領として出発したモラレス大統領と反政府勢力との駆け引きの行方は、一時といえども目を離せない状況です。

対外的にも隣国パラグアイに左派政権が誕生、アンデス共同体ではコロンビア・ペルーとエクアドル・ボリビアとの加盟国間に発展段階の差異が顕在化、南米諸国連盟（UNASUL）の成立など、これからのボリビアを取り巻く国際環境は、中南米だけに限っても大きな変化を遂げつつあります。こうした急展開する内外情勢の中で、日本との関係は、経済協力を中心として緊密かつ安定した関係が維持されております。

ご案内のとおり、ボリビアは、我が国資源外交の観点からも、ポテンシャルの高い国であり、またこの地域の安定のためにも、当国の政治的安定と経済発展は欠かせません。これからも一抹の不安と感動に満ちた当国での生活を満喫しつつも、今後とも微力ではありますが、日・ボ交流促進のために尽くしたいと思いますので、皆様のご理解とご支援をお願い申し上げます。

5月30日 ラパスにて

駐ボリビア日本国大使

田中和夫

柳原透 拓大教授からの寄稿

沖縄にとってのボリビア

沖縄にとって地球の裏側のボリビアは遠い国ではない。サンタクルス州には移住地コロニア・オキナワがあり、その「もう1つの沖縄」との官民にわたる交流がある。1992年11月には沖縄県とサンタクルス州の間に姉妹提携が宣言され、友好親善と交流が図られてきた。ボリビア政府は1998年にコロニア・オキナワを「行政区」として制定し、村役場を設置した。2004年8月には入植50周年記念式典が催され、沖縄からは知事、県会議長をはじめとする代表団が参加し、またボリビア側からは時のメサ大統領をはじめ中央および州の有力者が多数参列した。また、メサ大統領は2005年4月の米州開発銀行の総会の際に沖縄を訪問している。そして本年3月にモラレス大統領が訪日した際に東京で開かれた歓迎会には、嘉手苅名誉領事をはじめ県民および県系人が多数参加した。この席での演説で大統領はコロニア・オキナワが体現する県系人の勤勉の精神を高く評価した。また、コロニア生まれの二世である県系のアシミネ（安次嶺正勝）氏の駐日大使任命も特筆されるべきことである。

コロニアが歩んできた50余年は、ボリビアにとっても激動の歴史であった。琉球政府計画移民を推進したのは、1952年の革命で政権に就き民主化と開発を進めた革命国民運動党(MNR)のパス・エステンソーロ大統領であった。その後1960年代半から70年代一杯の軍政期を経て、民政移行後は少数の既成政党間での連立政権が続く中で、有力者による権益独占と汚職が慢性化し、多くの国民とりわけ先住民は貧困と差別の

中に放置された。2000 年以降、先住民を主体とする反体制運動が道路封鎖などの実力行動を伴って広範に展開され、2003 年 10 月には就任 1 年余の MNR のサンチェス大統領を辞任に追い込み、続くメサ政権も崩壊させ、2005 年 12 月の選挙では先住民運動の指導者であるモラレスが大統領に当選した。モラレス政権は「国家の再構成」を唱えて憲法改正を目指し、また資源からの国家収入の増大や農地改革を通じて貧困層の生活改善を実現しようとしている。このような方針は、サンタクルス州を中心とする東部地域の経済界や中産階層の反対を引き起こし自治への要求を強め、本年夏の制憲会議の終結に向け予断を許さない政治状況が続いている。ボリビアがこの過渡期を乗り越え、真の民主国家としての歩みを始めることを願う。

(柳原透 拓殖大学国際学部教授)

じゃがいもの旅の物語

インカからジパングまで NO.12

杉田房子
旅行作家

「こういう土地がいいのなら、ポルト・ベイヨにも根づくかもしれんな」やっと頃合の土地を見つけたらしく小粒のじゃがいもを植えたインカの男女と、手元を見つめる裸のインディオを眺めて、スペイン兵はつぶやいた。遠征を重ねた兵士ほど、食物が黄金同様に貴重な獲物なのを知っている。1513 年、パナマ地峡を横断して初めて太平洋岸に立つたバルボアも、飢えに苦しんだ。1671 年にパナマを陥落させたイギリスの海賊モーガンも、途中の空腹との戦いのほうがひどかったと述懐している。

穏やかな入江を前にひろがるポルト・ベ

イヨの緑の山野は、スペイン兵のつぶやくとおり耕地に向いていた。カリブ海の島々からメキシコへ、あるいはパナマ経由ペルヘ転々としたスペイン人で、一旗上げる夢に破れたあとに移り住んだ者も多い。アメリカ大陸でスペイン人が開拓した初の農耕地はここだった。

しかし、ノンブル・デ・ディオスのほうは荒礎のまま終始して、パナマ運河建設の時には砂利の採取地になった。海岸から難波した帆船を 2 隻も掘りだすことになった砂利取りの労働者は、密林をわが物顔に歩くアメリカ・ライオンのピューマに震え上がっている。ポルト・ベイヨではトウモロコシにサツマイモ、ヤムイモにじゃがいもが実っても、ノンブル・デ・ディオスには農園らしいものさえ、ついに切り開かれなかった。

「茎がここまで育ち、葉が茂ったら、パパスが地面のなかに実っている」

どちらの港にしる、そこで太平洋とはまるで縁がなくなるとも知らず、インカの男女は膝を叩いて高さを裸のインディオたちに示しながら、じゃがいもを 1 つ 2 つとパナマ地峡の大地に埋めていった。

「形はニンジンで、栗のような味がする」
「大根のような根を、煮たり焼いたり、あるいはパンのようにして食べる」

1492 年、新世界の島々で初めて見たじゃがいもを、コロンブスはこのように記録している。それから 10 年の間に 4 回、コロンブスが東から西へ島伝いに探検したカリブ海を、アンデスからはるばると旅してきたインカの男女と大袋に詰められたじゃがいもは、逆に西から東へ航海していた。

パナマ地峡東岸のインブル・デ・ディオス港からコロンビアのカルタヘナ港へ寄っ

た帆船は、スペイン人がヒスパニオラと呼んでいたハイチ島に向かっている。1493年1月16日、その島でアヘスと呼ばれていたジャガイモと10人ほどのインディオを積んだのを最後に、コロンブスは第1回目の探検航海からスペインへ帰国の道をとった。

しかし、この航海でアヘス、あるいはニアメスもしくはニアヘスと記録していたすべてをジャガイモと思っていたコロンブスも、そののちには、サツマイモとヤムイモと混同していたのに気づいている。

1498年の第3回目の航海では、600人のインディオをスペインへ連れ帰ったが、食料に少量のパタタと大量のパタタにヤムを積んだ。パタタはジャガイモだが、パタタはサツマイモ、ヤムはヤムイモを指している。混同されていたジャガイモとほかのイモとの違いに気づき、はっきりと区別しはじめたことになるが、ジャガイモが少量だったのは、その航海で寄ったカリブ海の島々と、南アメリカ大陸のベネズエラに、そもそもジャガイモが乏しかったからだろう。(次号へつづく)

ポリアは心のふるさと

食べ物に関するあれこれ

(その3) 最終回

細野 豊(詩人)

この文章の(その1)を書き始めたとき、私は終りをどのようにするか考えていなかった。最終回を書き出すに当たって考えた結果、楽しくまた少しほろ苦く、忘れがたいサンタクルスでの体験を語って、締めくくりとすることにした。

その頃(1976年)、一年中街が木々の緑に覆われ、赤や黄色や紫色に咲くハカランダやトボロチの花々でわずかに季節の移

り変わりが分かる亜熱帯の都市サンタクルスのゆったりした時の流れの中で、仕事の傍ら、画家、詩人、歌手、演奏家などの芸術家たちと交流する機会が増え、しばしば彼らをわが家へ招いてパーティーを催した。

初めてのときは、予想外のことばかりで、調子が狂った。午後8時にお出下さいと言っておいたのに、最初の客が現れたのは9時過ぎだった。しかも、招いた覚えのない人たちが大勢来た。招かれた人たちが身内や友だちを連れてきたのだ。

後で分かったことだが、ラテンアメリカではどこでも概ねこの調子なのだ。時間を決めてどこかで待ち合わせをする場合でも、約束の時間よりも前に来る人は全くおらず、10分か15分位遅れるのは普通で、30分の遅れも遅れのうちに入らないという感じである。待つ方も日本人のようにいらせず、朗らかに談笑したりしている。

しかし、わが家のパーティーの場合、招いた方は大変だった。特に最初の頃はなけなしの食材を使って、焼きそばや和風の焼肉を定刻に合わせて作ったのに、冷たくなってしまふ、と女房はやきもきするのだった。しかも、遅くなって予定の何倍もの人が来たりすると、あっという間に食べ物が無くなってしまい、追加を作らねばと右往左往するのだった。ある時などは、夜中の12時頃にやって来た若者が、まだ夕食を済ませていないので、何か食べさせてほしいと言い、女房が残っている唯一の食材、スパゲッティを茹で、醤油で味付けして出したのだが、慌ていたのでフォークの代りに割箸を添えてしまったところ、彼は使い方が分からず往生したという一幕もあった。だんだん慣れてくると、例の「チナ・ラウ」から来客数を見計らって焼きそばや

炒飯を取り寄せたり、カルネ・アサーダ(焼肉)の下拵えだけしておいて、参会者に自分で焼いて食べてもらうという知恵も働くようになったが。今になって思うと、女房は本当に大変だったし、二人の息子たちにもパーティーの間は何かと不自由な思いをさせてしまったが、私にとって、束の間とはいえ仕事の苦勞を忘れ、気の合った仲間たちと過ごせるひとときは、真に楽しく貴重だった。

今、手元に、わが家でのパーティーのことが書かれた1976年12月14日付のラパスの日刊紙「ウルティマ・オラ」の切抜きがある。ファン・オルテガ・レイトン名で書かれており、いかなる人物か記憶にないが、きっとラパスから出張で来た記者で、たまたまわが家をパーティーの折に訪れたのだろう。ボリビアで二番目に人口が多いとはいえ、地方都市であるサンタクルス市の一介の外国人の家で開かれたパーティーが中央都市の新聞記事になるほど、当時のボリビアはおおらかな国だったのだ。(今ではサンタクルスでの生活も世知辛くなり、治安も悪化していると聞くが...)

「(前略)サンタクルス市へ小旅行をした折に夜のパーティーに招かれ、「自由人たち」と知り合うことが出来た。参会者たちは楽しく愉快的な雰囲気の中で歌い、踊り、詩を朗読し、多くのことを語り合った。

発展し続けるサンタクルス市を見るのは驚きであり、また楽しくもある。ここの人々の活力はこの都市をダイナミックにし、全ての活動にモダンなリズムを与えており、社会・経済構造の繁栄と変化が著しい。また、文化の分野においても変化は激しく、サンタクルスの精神生活におけるその重要性は増している。とはいえ、サンタクルス

の男たちが伝統的な習慣を捨ててしまったわけではなく、東部魂は健在である。星の輝く夜の生暖かく素敵な空気に包まれて、優雅で愛らしいサンタクルス娘の家の戸口で、タキラリやカルナバリートやボレロのリズムに乗せて、セレナータを奏でている。「自由人たち」グループの世話役で、創設者は優秀で魅力的な画家、エクトル・ハウレギーである。そして、ボリビア文学の巨匠としてこれらの若者たちを支援しているのが、名門トリスタン・マロフ氏である。

彼は知的な話術と陽気なコメントで場を盛り上げる。マルセラ・ベラルデの熱っぽく官能的な声を聞くのは驚きであり、その音色は聞く者を虜にする。マルセラは、サンタクルス女の心と熱帯の女の優しさを込めて歌った。彼女は魅力的で美しいのみならず、真の芸術家である。細野夫人が歌った日本の子守唄もまた甘美で印象的だった。彼女の夫で、若く洗練された詩人、細野豊氏は自分の詩と他の日本の詩人たちの詩を朗読した。(以下略)」

この記事には書かれていないが、若手女性画家、カルメン・ピリヤソンは、パーティーのたびに、1967年に彼女の生まれ故郷、サンタクルス州バリエグランデで悲劇的な最期を遂げたチェ・ゲバエラを悼む歌をハスキーな声で歌った。

ところで、チェ・ゲバエラは、その死後フィデル・カストロ以上に民衆の間で人気が高いことを、私は1997年12月に当時在勤していたメキシコシティからハバナへ数日間旅行した折に実感したが、その理由はどこにあるのだろうか。

キューバの工業大臣という地位に安住出来ず、それを投げ打って、貧しい人民を立ち上げさせるために単身ボリビアへ潜入し

た彼の純粋な生き方に人々は惹かれるのではなからうか。

潜入したボリビアに、彼とともに立ち上がるはずの人民はいなかった。それどころか、貧しい人たちは懸賞金欲しさに彼を官憲に売った。こうしてゲバラは悲劇的な死を遂げ、彼の名は不滅となったが、人間がこの世に生き続ける限り、「人間が人間を支配しない平等な世の中」を作ろうとする者は、今後も現れ続けるだろう。そして、人間が今のような人間であり続ける限り、いつまで経ってもそのような理想的社会が実現することはないだろう。

最後に、上に述べた女性画家、カルメン・ピリヤソンに捧げた私の詩の一節を記して、締めくくりとしたい。

グアプルーの実でいっぱい
皿を両手にかかえ
密林のなかにひとり
立っている妖精
カルメン・ピリヤソン！
びっしり繁った濃緑のなかに
トボロチが咲くとき その花と
熟れたバナナの匂いに包まれ
ぼくら 愛を分け合って
食べようよ - 終り -

親の心・子の想い

移住した一世の「親の心とその子に託する期待」と現地で生まれ育った二世の「子の想いと生き方」との『世代間のギャップ』を著者自らが、沖縄移住地においてフィールドワークして見事に浮き彫りにしている移住地社会に関する貴重な資料です。(渡邊)

第1章 コロニア・オキナワの形成の歴史と現在

武庫川女子大学 生活美学研究所
(元)助手 柏木 舞子

1 - 1 . ボリビア共和国の概況 日本との比較による

本論に入る前に、ボリビア共和国の概況を、日本と比較しながら、簡単に捉え直しておくことにする。

1 - 1 - 1 . 人口および国土面積

ボリビアの国土面積は約 110 万平方キロメートルである。それは、日本の 38 万平方キロメートルの約 3 倍にあたる。しかし人口は 810 万 5,000 人。日本の 1 億 2,600 万人に近い人口の 15%にしかない。そのため人口密度には、44.9 倍もの格差が生じる。それだけ日本は高密度であり、逆にボリビアは低密度だということになる。

とはいえ、ボリビアにおいても、人口の都市集積が著しい。2001 年度の統計調査によると、首都ラ・パス市の人口は 147 万 6,721 人、サンタクルス市の人口も 111 万 3,582 人に達している。

つぎにボリビア国民の人種構成を参照する。それは、インディオ、メスティソ、白人系に、大きく三分される。そのうち、過半を占めるのがインディオであり、全体の 3 分の 1 をメスティソが占めている。そのあとの残りのほとんどが白人系だということになる。

人種の分布を調べてみると、ラ・パス市をはじめとする高地の都市ほど、インディオの比率が高い。逆に標高が下がるにつれて、その比率は低くなる。実際、たとえばサンタクルス市には、メスティソと白人系の居住者が多い。白人系の人々のルーツはスペインにある。ボリビアは、1533 年から 1825 年まで、スペインの植民地となっていたからである。

1 - 1 - 2 . 国民経済

ボリビアと日本の国民経済の状態を一瞥しておく。それを国内総生産（GDP）と国民総生産（GNP）の比較に代表させて提示したのが表2である。

表2：ボリビアと日本の国民経済（1998）

	実質国内総生産 (単位：百万ドル)	一人当たり GDP (単位：ドル)
ボリビア	8,571	1,077
日本	3,782,734	29,956

	実質国民総生産 (単位：百万ドル)	経済成長率 (単位：%)
ボリビア	6,974	4.7
日本	3,303,324	2.8

出所：国際連合統計局編『国際連合世界統計年鑑』（原書房,1998）p.134,140による。

この表によると、一人あたり国内総生産は、日本の、わずか27分の1にすぎない。

しかし、すべての国民が貧しい生活を営んでいるわけではない。高所得層は、ラ・パス市やサンタクルス市などの都市の郊外にある高級住宅街に大邸宅を構えている。

一方、国民の6割を占めるといわれる低所得層は、日干し煉瓦に椰子の葉を葺いた粗末な住宅に住んでいる。歴然とした貧富の差は、スリや強盗などの犯罪を誘発し、治安の悪化を促進させる要因の一つとなっている。

加えて、ラテンアメリカの国々の経済状況は、総じて流動的である。その中でもボリビアは、国内通貨のインフレーションが特に激しいことで知られている。1985年には、インフレ率が11,980%を記録した。

現在でも、国内通貨の「ボリビアーノ」の為替レートは安定せず、アメリカドルに対する価値は下降の一途をたどっている。

1 - 1 - 3 . 産業別雇用者分布

ボリビアと日本の産業別雇用者の割合を示した図1を参照してみよう。この図を一見すると、ボリビアと日本の産業構造には、それほど差異がないように思える。しかし、詳細に検討すると、「鉱業・採石業」の数値に大きな違いのあることが分かる。すなわち、こうした産業に従事している人の比率が、日本では0.1%であるのに対し、ボリビアでは1.9%となっている。実は、ボリビアの主幹産業は、鉱業なのである。

ボリビアは、スズ・鉛・銅・金・銀・亜鉛・アンチモン・タンゲステン・石油・天然ガスなどの地下資源に恵まれている。これらの鉱物は、主要輸出品目であり、国の経済を支えている。そのことが、日本の19倍という、鉱業・採石業従事者の比率に現れているのであろう。

農業における主要産物は、サトウキビ・ジャガイモなどである。また、羊・牛・アルパカの畜産も盛んである。

いまひとつ注目すべきは、ボリビアが「世界第2位のコカ産地」だという事実であろう。コカを精製すれば、麻薬のコカインが抽出できる。そのためにアメリカは、経済援助の条件としてコカ畑の削減を要求している。ただし、この要求に対しては農民の抵抗が根強い。（次号につづく）

白石健次さんの寄稿

戦後の集団海外移住の推進は、終戦後の経済混乱期に計画が始まったものであり、1ドル360円という日本円の相対的価値の無さと外貨持出制限等々の制約、あらゆる方面での交流不足による相手国に関する基本的な情報と知識の不足もあり、移住地の設定やその推進方法において、現在の視点

で見ると「何故？」と問いかけたくなる点が多々あったことは否めない事実である。

しかし、300 万人以上の戦死者を出し、食料にも事欠いていた当時の世相と「性急に何かに縋らないではおれなかった」人々の心理状態は、そこに内在する多くの問題点が、奇異感ぜられることもなく、見過ごされていたことも事実であった。

その結果として、後に、多くの難問が移住先の各国・各地で噴出し政策のほころびが露呈することとなった。海外移住事業団が設立され、国策としてそれらの問題案件が引継がれたが、その役割は、「移住の促進」という設立目的よりは、むしろ、引き継いだ事業のほころびの繕いに全精力を傾注したとって過言ではない。

琉球政府時代に推進された沖縄県のポリビアの集団開拓移住地「コロニア・オキナワ」への対策も同事業団に引き継がれた。

白石さんは農林省の農業土木技術者から転じて、自ら多くの現場で改良作業にあたり、また海外移住事業団そして JICA においてその部門の長として、全ての集団移住地の問題点を把握されていた人である。

もう日本人が二度と経験することのない貴重な体験談をここに掲載し、歴史的資料として残せるのは、極めて有意義なことである。(記：渡邊)

=集団移住地造成雑感=

農業技術士：白石健次

《はじめに》

先般、小泉首相の決断によりドミニカ移住問題が解決した。この問題は長年紛糾を続け、決着の目途はまったく立っていなかったのである。(小泉さんは現在首相を辞めておられるが、首相在任中の話)

小泉首相が異例の決断を行った背景には、小泉さんのグッタパラ移住地着陸が無視できないと思う。小泉さんは 2004 年 9 月 14 日(伯国訪問の初日)午後、グッタパラ移住地に近い製糖工場のアルコール生産状況視察のため、アルキミン・サンパウロ州知事、堀村駐ブラジル日本国大使と一緒に、3 台のヘリコプターに分乗して、同移住地の上空にさしかかった。移住地では予め、首相が移住地上空を飛ぶことを知って、移住地内の広場に、「歓迎小泉首相」と石灰で書き、日本・ブラジル両国旗を掲げて、百人以上が集結していた。一方小泉さんの方も、移住地上空を通過時に移住地の墓碑に花束を投下すべく準備していた。ヘリコプターの窓から下を見た時、狂喜して手を振る移住者の動きは異様で、激情型の小泉さんの心に響くものがあったのであろう。首相は機長に頼んで、予定外の着陸を行った。プロペラの風圧で砂塵が舞い上がる中、小泉さんが降り立つと、移住者たちは歓声を上げて飛びついて来た。それは幼稚園児が親や先生に対して行う動作と全く同じ、老人も、婦人までが走り寄った。特に寺内実雄さん(79 才)は首相前に跪き首相の腰に抱きついて泣いていた。正に狂喜乱舞の世界であった。首相は移住者たちが如何に日本を、又その代表である自分を頼りにしているかが分かったに違いない。翌 15 日サンパウロ市の文協会館で、首相が日系人に対し講演を行った時、話がグッタパラ移住地のことに及んだ時、首相は突然絶句して落涙した。会場は一瞬水を打ったように静まりかえった。

以上は私の数代後のグッタパラ事業所長、籙木功氏が送ってくれた日系新聞記事によるものである。

私は小泉さんに抱きついた寺内実雄さんは良く知っている。当時、移住地の水利工事が難航して、夜も眠れぬ日々が続き、早朝から運転手をたたき起こして、現場へ出ることが多かった。私が現場に着くと、もうその頃寺内さんは美人の奥さんと共に野良着姿で、農作業に励んでいた。水田目的で造成した低地ロッテに水乗りが悪く、移住者は米は陸稲式、裏作はトマト、パタタ(じゃがいも)栽培を行っていた。しかし、稲は徒長して倒伏、裏作は霜害で全滅。落胆した移住者は、退耕する者もボツボツ出始め営農指導のコチア産組は、養鶏に切替える計画を模索し始めた時期であった。あれから40年、寺内さんは良く頑張ってくれた。寺内さんは積年の思いを小泉さんにブツけたのだと思う。

ドミニカ移住問題は一件落ち着いたが、これを機に、集団移住問題が直面した問題を第一線業務を担当した者の視点で述べてみたいと思う。

我々には移住者からも、マスコミからも厳しい批判があることは、充分承知しているが、我々がいくら努力しても解決できない問題があったのである。我々の仲間のあるものは、過剰なパフォーマンスを行い、自爆的行為で当局に対して抗議して移住者から拍手喝采を浴びた人もいたが、そんなことで永続的效果が得られるものではない。

《適地調査》

我々末端実務担当者に、最初に課せられる仕事は移住地の適地調査である。

集団移住地は、素地の種類、予定営農形態、市場、生活環境等で、多種多様に分類されるが、大雑把に次の分類により話を進めていきたい。

(1) 僻地原始林型移住地

(2) 都市近郊型移住地

(3) 要土地改良型移住地

(1) 僻地原始林型移住地

この型に属するのがパラグアイ、ボリビア、及びブラジルのトメアス移住地である。

マスコミによる批判は、数万ヘクタールの大移住地の現地調査が僅か3日、こんなことでは、後々問題が生ずるのは当然と言ったようなものが多かった。これが一見大衆受けする極めて分かり易い発言であるが私に言わせると南米の原始林を全くご存知ない人の発言と思わざるを得ない。

南米の原始林は、例え専門家でも、単なる目視による調査なら、数ヶ月、場合によっては、1年やっても結果は同じと言いたい。飛行機で、上空から調査しても土壌の良質判断はできない。具体的にいうと、パラグアイの原始林とアマゾンの原始林は、樹高40メートル以上、樹冠の繁茂具合も良くにている。然し、パラグアイはテラロシア(赤土)の優良土壌であるのに対しアマゾンはテラヒルメと呼ばれる瘦薄土壌なのである。

(2) 都市近郊型移住地

ブラジルのジャカレイ、ピニャール、フンシャル、バルゼアアレグレがこの型に属する。適地調査も合理的に行えるし、土地選定の失敗例も少ない。然し、素地代が高く、大面積の取得は困難、将来の経済的な伸びも期待できない。当初バルゼアアレグレは適地調査の誤りとして、随分マスコミにも叩かれたが、当初の営農指導が間違っていたもので、都市近郊型の視点で指導方針を替えたところ、南マットグロッソ州の主都カンポグランデの発展と共に移住地の営農は安定した。

(3) 要土地改良型移住地

ブラジルのグアタパラ、アルゼンチンのアンデス移住地がこれに属する。

立地条件としては都市近郊型に近く、市場条件も有利であるが、気象、素地の地味の関係で土地改工事を必要とする処である。グアタパラでは、河川氾濫原である湿地の改良を行い、灌漑排水により、生産性を高めるもの、またアンデスでは乾燥気候による塩分土壌を灌漑排水工事により、塩分を土壌から除去し、降水不足を補充するものである。面積は原始林型に比し、非常に小さいが、適地調査で調べる項目は圧倒的に多く、本格的に行えば多額の先行投資になりかねない。結局、現地の関係機関の情報を丸呑みせざるを得なかったことに問題発生の原因があった。

グアタパラは、適地調査をコチア産組に全面委任して用地を取得、全拓(全国拓殖組合連合会)2名の調査員が確認のために派遣されたが、肝腎の農業土木専門家が含まれていなかった。農業土木専門家が派遣されたのは、計画調査に入ってからであった。

全拓の資金は全て農林中金の金利のつく金であり、外務・農林両省間の事務調整に時間がかかり、調査に入ってから、超スピードで計画書を作成しなければならなかったから手間・暇のかかる泥炭地分布調査等をやっておる状態ではなかった。

然し、結局これが祟りとなったのである。

アンデス移住地は農林省から2名の技官が適地調査に来た。1人は農業土木専門家であったが、振興会社のブエノスアイレス支店には、塩分土壌処理についての調査結果は何も残されていなかった。

現地はアルゼンチン国の土地改良事務所管轄下にあったから、塩分処理問題は同事務所任せと考えたのかも知れないが、それ

は間違いであった。(以下次号に続く)

新刊のご紹介

『私の確信』-難病を救う EM-X-

医師・医学博士**田中 茂**著 メタモル出版
当協会田中茂相談役(朝霞厚生病院会長
EM-X 予防医学研究所長・前和光市長)は、副作用のない EM-X の驚くべき治癒力に着目して臨床治療に応用し、研究しています。この度、その研究データに基づいた本を出版しました。副作用がない上に抗がん剤等との併用により薬効がさらに高かまるという画期的なものとしてヨーロッパの学会でも注目されているとのことです。(渡邊)

サロン・ド・デボン

当協会員の**大野透太郎**さんより、元アンデス化石館の**デボン紀化石約 60 ケース 1.2 トン**を国立上野科学館へ寄贈して、閉館した旨のお便りを頂きました。また、7月12日に残余の化石等を展示して、販売も兼ねたミュージアムショップ『**サロン デ デボン**』を下記の場所に開店されたとのことです。

和歌山県田辺市宝来町 18-7

TEL0739-26-5001 FAX0739-26-8331

オリオンビール祭り

毎年、「海の記念日」の3連休に恒例となった新宿「伊勢丹」屋上のビアガーデンの『**オリオンビール祭り**』は今年も大盛況で、東京在住の沖縄県系人でテーブルは満席！中に、チラホラとボリビアから働きに来ている人の顔も見受けられました。世界最高のホップを使用しているオリオンビールの美味さに暫し暑さを忘れました。(渡邊)

チャリティゴルフ沖縄大会模様

ボリビアンチャリティゴルフ沖縄大会には、今年も本土から 14 名と地元から 41 名の総勢 55 名の参加を頂き 2 月 15 日オリオン嵐山ゴルフ倶楽部で盛大に行われました。



左から嘉手苅ボリビア名誉領事・毎回ご参加の呉屋ペルー名誉領事・渡邊専務理事・奥原ホテルロイヤルオリオン総支配人



優勝者は毎年参加の読谷村の知花昌彦さん



鶴見のコロニアオキナワ出身者の皆様も 4 年連続出場で、特別ご寄付も頂きました。

編集後記

カントウータ 12 号をお届けします。今号では田中和夫ボリビア大使から貴重なお便りをいただき、現在のボリビア現状をよく理解できる文面は、会員の方もじっくりお読みいただけたと存じます。ラパス空港時の医務官からの健診は、高度 4000M の空港のため。高山病の不快感を思い出す方もおいでのことでしょう。私も頭痛やらフラフラ感を思い出しました。田中大使がチチカカ湖の町コパカバーナを訪れたとき、多くの人から花輪やジャガイモの首飾りを首にかけて歓迎されましたが、花輪は当然のことですがジャガイモの首飾りは発生地だけのことはあると納得。田中大使には今後もボリビアから生の情報一杯のお便りをいただきたく、ここでも重ねてお願いいたします。コパカバーナについては、カントウータ NO2 に林屋会長が「コパカバーナの聖母」のタイトルで書いてくださっていますので、ご参考までに。

また、柳原透拓殖大学教授からは大分以前にご寄稿を頂いていながら、当方の編集が、委員の海外転出や病気等が重なり編集・発行が大幅に遅れてしまい、今回の掲載となりましたこと、誠に申し訳なく存じております。心よりお詫びを申し上げます。今後このようなことのなきように体制作りもして参りますので皆様の原稿を事務局へいただけますようお願いしております。

.....

(編集委員)

杉田房子委員長、大貫良夫、細野 豊

(広報委員)

渡邊英樹、長嶺為泰、金木克公